

教職志望の大学生における授業リフレクションの事例研究

Case Study of Class Reflection by University Students who Wish to Become Teacher

芥川 元喜 (人間科学部こども学科准教授)

Motoki AKUTAGAWA (Faculty of Human Science, Department of Child Study, Associate Professor)

〈要旨〉

大学生が行う授業リフレクションとして、現職の教師と大学生が連携して行う授業研究ツールを共同で開発した(日本教育工学会全国大会2011)。そこで、大学生においても「気づき」(awareness)が生まれ、「実践的認識」(practical knowledge)の獲得の基礎となる変容が見られるデータを発表した(日本教育工学会全国大会2014)。こうした研究経過より、大学生が授業リフレクションを実践することは、実践的知識の基礎を育成していくにあたって、効果的であると考えられる。そこで、本研究では、大学生が基本的な授業リフレクションの手法を身に付ける「授業リフレクションアプローチ」(日本教育工学会全国大会2017)に基づき、授業リフレクションを行い、その結果から、教員養成段階において、教職志望の大学生が授業リフレクションを行うためのよりよい方法と手立て、そして、課題について考察した。

〈キーワード〉

授業リフレクション 自己リフレクション 集団リフレクション

1 研究の背景と研究の履歴

1-1 求められる教師の力量

2017年に告示された新学習指導要領では、「主体的で対話的で深い学び」が求められ、教育における教師の役割もさらに幅広く、求められている。従来の教える学び、学校教育の在り方は転換の時期を迎えていると言っても過言ではない。こうした状況のなかで、新しい学校教育に柔軟に対応し、「主体的で対話的で深い学び」、アクティブ・ラーニングを基盤とする授業づくりには、教師のより一層深い「学び」が求められる。まさに、教える専門家から、学びの専門家としての転換であり、学びの専門家としての教師の力量がこれから求められてくる。

では、授業において、教師にはどのような力量、知識が求められるのであろうか。リー・ショーマン (Lee S. Shulman) は、教師として必要な知識として、「授業と学びに翻案した教科内容の知識」(pedagogical content knowledge, PCK)という概念を提唱した(八田, 2009)⁽¹⁾。八田(2009)によると、この「PCK」とは一般的に「内容に関する知識 (content)」と「教育方法に関する知識 (pedagogy)」の「特別な混合物 (the special amalgam)」と定義されており、各教科領域の教師に特有な知識とされ

ているという⁽²⁾。また、ショーマンは、教師の教師が保有している知識である「知識基礎 (knowledge base)」の構成要素をカテゴリー化して整理している。このPCKも含め、具体的に、次の7つが挙げられている⁽³⁾。

- ①内容についての知識 (content knowledge)
- ②一般的な教育方法についての知識 (general pedagogical knowledge)
- ③カリキュラムについての知識 (curriculum knowledge)
- ④授業と学びに翻案した教科内容の知識 (pedagogical content knowledge)
- ⑤学習者とその特性についての知識 (knowledge of learners and their characteristics)
- ⑥教育の文脈についての知識 (knowledge of educational contexts)
- ⑦教育の目的、目標、価値、哲学的歴史的基盤についての知識 (knowledge of educational ends, purpose, and values, and their philosophical and historical grounds)

教師の「実践的知識」(practical knowledge)は、このショーマンの述べる「知識基礎」(knowledge base)を基盤とする知識とも考えられる。こうした知識基礎の基盤となる資質を、これから教員になろうとする教職志望の大